
みつくり ～春恋桜～

流水音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みをつくし　〜春恋桜〜

【Nコード】

N6285X

【作者名】

流水音

【あらすじ】

ここは、私立櫻華台学院。齡千年の学院の象徴。

今年の学院祭生徒会劇は櫻由来の悲恋物語。

主役は、眉目秀麗の生徒会長、青冥。

相手役は、中等部からの大抜擢、紅蓮

青冥は『稀代の陰陽師』。その肩書き故。

偽りの言霊である演技がうまく出来ない。

『ハリウッド帰りの帰国子女』、紅蓮は、副会長兼監督命令で、泊り込みで演技指導。

口伝で演技の言霊を伝える事になる。

恋愛劇の練習。二人の仲は深まっていく。

そして、リハーサル当日。

青冥のみが気付いていた、主桜の異変。

中に巢食う魔物と、とうとう対峙する。

主桜と共謀し、体の自由を奪われ、傀儡に間犯されそうになった一髪。

火御神ほのみかみの如く。炎を操る紅蓮あやつるに助けられた。その夜、穢れを知らぬ紅蓮の想いを青冥は受け入れる。

大成功を収めた劇の後……

青冥は紅蓮と共に、その力で千歳ちとせに凝る主桜の彼岸を達成してやるのだった

たえてさくらの

☆本編を読まれる前に☆

復帰に当たって、恥ずかしながら、実は何社か各誌に投稿してみま
した↑（昔は直投稿するしか方法がなかった）W。

投稿した状態そのまま掲載してみようと思っています。

結構勇気が要りますが……（へーへ；）

結果発表は最期で……（＊へへ＊）ドンナ シュウチ プレイ？
こんな、おぼちゃんが頑張っているのもっともっと若い、未来
溢れる方で頑張っている方の励みや、参考に少しでもなれば幸いで
す。

☆あらずじ☆

（400字）

ここは、私立櫻華台学院。おうかだい 齡千年の学院の象徴。よわい シンボル

今年の学院祭生徒会劇は櫻由来の悲恋物語。

ヒロイン 主役は、眉目秀麗の生徒会長、青冥。せいめい

相手役は、中等部からの大抜擢、紅蓮。ぐれん

青冥は『稀代の陰陽師』。おんみょうじ その肩書き故。ゆえ

偽りの言霊である演技がうまく出来ない。いつわ

『ハリウッド帰りの帰国子女』、紅蓮は、ぐれん 副会長兼監督命令で、

泊り込みで演技指導。

口伝で演技の言霊を伝える事になる。くちづて

恋愛劇の練習。二人の仲は深まっていく。

そして、リハースアル当日。

青冥のみが気付いていた、主桜の異変。

中に巢食う魔物と、とうとう対峙する。

主桜と共謀し、体の自由を奪われ、傀儡に間犯されそうになった
一髪。

火御神ほのみかみの如く。炎を操る紅蓮あやつるに助けられた。その夜、穢れを知らぬ紅蓮の想いを青冥は受け入れる。
大成功を収めた劇の後……
青冥は紅蓮と共に、その力で千歳ちとせに凝る主桜の彼岸を達成してやるのだった。

☆このあらすじが、実は一番アタマ使います（＜―＞；）
編集がここで振り落としにかけてるんじゃないかと思うくらいムズい（‘口’；）
てか、原稿100枚を400字って……無理やろっ！（ㄟ ㄉ ㄢ）W
一番気を使って書くポイントですね。

さて、本文に入るとしますか。

みおつくしはるこうろう春恋桜

流水音るみね

第一章 たえてさくらの

一片ひとひら。暖かい風。薄紅うすくれないの春の欠片かけら。

春日はるひの精の《いたずら》。

気にも留めず、歩み寄る美影。
二片ふたひら

気を惹くひように、紫紺つめえりの詰襟ひの肩に遊ぶ。
構わず、葉づきの幹。真中まなかに手を当てる。
ざわ。

風は、皆無。だが、枝が騒ぐ。

はらはら。ひらひら。

漆黒の髪。白晳の頬。華奢な首。詰襟の肩。
薄桃色のあたたかい雪が降りしきる。

「散りゆきて尚、惑わすか？　よかろう。

……やってみろ。」

澄んだ声が静かに。

それは静かに、幹に凍みる。

幹に当てられた指は白磁。

指と揃いの頬には、何の感情も映さない。

ざわざわ。

梢が大きくざわつき。薄紅が舞う。

「内なる水気を以って縛す。水紙。」

微かに。美影の眉がひそまる。

発する気は、水。

呪で、空気が張り詰める。

『騷』から『静』へ。

花片は憐れ、舞う事すら許されず、地に敷き、散りばめられた。

静かに、風が吹く。

呪は確かに、効いている。

だが……静か過ぎる。

精神を集中。

幹の内部に張った水系を手繰る。

「セイさん。」

不意に。

眩い真夏の光が差し込んだ気がした。

「お前は……火月。」

「僕の名前、覚えていてくれたんですね。嬉しいな。」

中等部の制服を着た後輩が懐こく笑う。

「セイさん。桜の花片が……。」

火月はふと、彼の肩に遊ぶ花片を摘み取る。

ギイイイイイイッ。

花片^{はなびら}に身を襲^{やつ}した小隗魔^{こかいま}が。

火月の指先から溢れる炎に炙^{あぶ}られた。

澄みすぎた、陰陽師^{おんみょうじ}の瞳にのみ映る光景。

「火月……お前……。」

「？」

だが、当の本人は全く自覚はないらしい。
稀^{まれ}に、いる。

全くの無意識下で、破魔の術^{あやつ}を操れる者が。

彼の目が、ふと火月の胸の名札に留まる。

『火月^{かつぎ} 紅蓮^{ぐれん}』

それは。正に今見た炎の色。

名は体を現す。

「どうしたんですか？ セイさん……」

ひとり。納得してじっと見つめる青冥。

紅蓮は真っ直ぐな薄茶の瞳を返してきた。

日本人にしては薄い色素の瞳と髪。

帰国子女の噂は本当か？

明るく、強い火気が瞳から流れ込む。

これも、彼の上に解る感覚。

『この気は……苦手だ。』

自分とは真逆の火気。

紅蓮の瞳から逸^そらした目が、今時風に着崩されたネクタイにとま
る。

「中等部？ B、火月^{かつぎ} 紅蓮^{紅蓮}。服装の乱れは風紀の乱れに繋^{つな}がる。」

彼は紅蓮のネクタイを絞め直した。

「はい、ありがとうございます。」

注意された紅蓮は、嬉しそうに、にこにこ。

「セイさんもこれから生徒会ですよね？」

彼の手に持たれた書類を見、相変わらずににこ顔の紅蓮。

ああ、幻の犬尻尾と犬耳が見えそうだ。

「また迷ったのか？」

「はい。高等部の校舎に来る事、あんまりナイんで。」

全く悪びれた様子も無く、紅蓮は応える。

そう、生徒会初日。

あからさまに場違いな中等部の制服ブレザーを着て。

うろついているこの迷い犬を、うっかり拾ってしまった。

以来。妙に懐なつかれてしまっている。

「こっちだ。」

「はいっ、セイさん。」

パタパタとご機嫌に振られる尻尾。

笑った赤い舌まで見えそうだ。

「私の名前は聖せいではない。聖ひじりと読む。」

読み間違いの指摘に、紅蓮はレコード会社の看板犬の様に不思議

そうに首を傾かしげる。

「え？ でも、名前……青冥せいめいさんでしょう？」

そして、再びにっこり。

「だから、セイさん。」

ファーストネームの、しかも、愛称で呼ばれていたのか……。こ

れも、欧米化？

「セイさんって呼ばれるの……イヤですか？」

くるくるつとした、心配そうな薄茶の瞳。

そんな、犬耳を萎しおれさせなくとも。

「いや。別に……。」

ぱっと耳が立ち、表情が明るくなる。

実に解りやすい。

「じゃ、僕の事も『紅蓮』って呼んで下さい。」

「解った。」

そんな会話をしながら、生徒会室に着いた。

私立櫻華台学院。おうかだい

中高一貫の六年教育を誇る、都内でも屈指の進学校。

完全単位制のカリキュラム。

完全成績別のシビアなクラス編成。

どちらも名物のブランド校だった。

今日の議題は、毎年ゴールデンウィーク最終連休に行われる、学園祭についてだった。

「はい、はい、静粛に。静粛に。」

議長席で、今日は、副会長の佐奈が吠える。

手には、なにやら台本が。

学園祭の名は皐月祭こげつきまつりという。

三日間、学園の門戸は一般にも大きく開かれる。今日は、その皐月祭での生徒会でのメインイベントの劇の話し合いだった。

今日は生徒会長と席を変え、佐奈が牛耳っている。

「おい。佐奈、大丈夫か？ お前、目の下、すげえくまっ！」

同学年の会計が佐奈に突っ込む。

「ああ、この台本書ほんくののに、ここ二日、ろくに眠ってないんだよ。その代わり、サイコーケツサクよん。さ、これで大丈夫。」

そして、腰に手を当て、ドリンク剤を一気。

「まゝずゝいゝ。もう一杯！」

ベタな手で笑いを取ってから、佐奈は台本を配ってまわった。

手渡された台本の題名は、『櫻華台』おうかだい。

学園の名の由来となっている齡千年よわいの主桜。

現に伝わる、遠い御代の夢語り。

「佐奈、お前、広島弁の任侠ジュリエットにするって言ってなかったか？」

今度は書記に突っ込まれる。

「あ、その事か。実は、な。台本を書くに当たって、俺は重大な事に気づいたんだ。」

佐奈は珍しく深刻な声と真顔で告白する。

「……俺は、広島弁は喋れない。」

彼の告白は生徒会の大爆笑を買った。

「ま、取りあえず、読んでみ？　もう、国語科の先生達絶賛の人生の最高傑作よ？」

そう豪語する佐奈。

此は、桜花精の護る丘。

主の横、楕円の空座。

在るべくはずの伴侶の雌桜。

皇女にと望まれ、都に上り。

ついに音に聞こえまじ。

残されし君の想い。

百代に凝り、人を怪しめる。

千歳を越えた今日ここに。

契りおきし、逢瀬を果たしにけり。

それは、この学園に伝わる悲恋の伝説。

佐奈はその悲恋を美しく脚色。

再会を果たす、ハッピーエンドに書き換えていた。

生徒会室は、しんと静まりかえってしまふ。

女生徒の中には、うつすら涙を浮かべる者もいた。

「どうよ？」

その反応を満足気に見回す佐奈。

「すごいステキですっ、せんぱいっ」

今年のミス櫻華台と噂の高い、？Dの中川 梓がうっとりとした表情で佐奈を見つめる。

「ありがとう。自分の才能がつ、コワイっ。」

佐奈はふざけて口元に手をやり、しなを作ってみせる。

「何でおカマなんだよ！」

書記がまた、絶妙な間でツツコむ。

「……これは……。」

青冥は渋い顔で佐奈に向いた。
その蒼い程に澄み過ぎた瞳で、じっと佐奈を見つめる。

「……大丈夫か？ 佐奈。」

「ダイジョウブ、ダイジョウブです！ ほら、さつきドリンク剤も飲んだし。」

似非^{エセ}外人口調でウケを狙^{ひつら}うも聖は反応なし。

「んもう、つれないなあ、この、ビューティーブルーわつ。中等部以来の親友なのに。っーか。何か、無茶苦茶心配されてるっぽいんですケドお〜」

そして、佐奈は思い出す。

『稀代の陰陽師^{おんみょうじ}』という彼の肩書きを。

「まっ……ましゃかつ！」

「佐奈、お前の……」

「わあゝ、わあゝ、わあゝ、言うな、聖、キキタク、ないっ！」

続けようとした青冥の言葉を、佐奈は自ら大声を出して遮^{おさえ}った。

「俺は、幽霊^{ユーレイ}とか、妖怪^{ヨウカイ}とか、悪魔^{アクマ}とか、訳の解らんコワイモンは信じない事にしてるんだ。神様^{カミサマ}とか妖精^{ヨウセイ}とか、天使^{テんシ}とか、綺麗^{キレイ}で良いモンは信じるけどな。この歳で、夜中に一人でオシッコに行けなくなったらどうしてくれる？」

「解った。」

青冥は頷^{うなず}いた。

佐奈といい、紅蓮といい、強い者は、鈍い。

更に、佐奈は明るくお笑い路線に持っていつてくれるから助かる。
「あ。それから、俺の独断と偏見で、キャストを決めておいたから。続いてキャスト発表、ドンドン、パフパフ。」

先ほどの栄養ドリンクが効いてきたのか。

自ら、ボイスパーカッションで盛り上げる佐奈。

「桜花精、ヒロイン、華那^{かな}。モチロン、聖^{ひじり}。男桜精1、小田。女桜精1、中川。男桜精2、甲斐……」

次々とキャストが読み上げられ、その都度ざわめきが起こる。

「そして、お待ちかねっ、ヒロインの相手役。桜花精の主、紅主わっ。デロロロロ……」

小太鼓まで演出し、佐奈は議長席を下りる。

そして、ひとりの前でぴたりと止った。

「かゝづゝきゝ、ぐゝれゝんゝ」

まるでリングネームを呼ぶように名を呼ぶ。

中等部からの大抜擢だった。

ざわつくギャラリーに、佐奈は尤もらしく腕を組んで頷いてみせる。

「うん、やっぱりこういうのは、専門家に任せた方がイイ。お前、帰国子女でハリウッド仕込みなんだろう？ 火月、やってくれるか？」

「はい。」

紅蓮は臆さず、良い返事を返す。

「おお、心の友よっ。……そうだな、紅蓮、ちょっと演ってみせてくれないか？」

収まらないざわめきに、佐奈は紅蓮を焚きつける」。

「……どこを演れば良いですか？」

「この子っ、受けて立ったわっ！ どこでもいい。お前が一番気に入ったところ。」

紅蓮は手元の台本を置くと、ひらりと会議用の長机を飛び越えた。

そのまま、真っ直ぐに青冥に歩み寄り、手を優しくリードして立ち上がらせた。

もともとくせっ毛の赤茶の髪をぐしゃぐしゃとかき回し、左腕をだらん、と力なく垂らす。

無事な右腕を大きく広げ、青冥を背に庇う。

それは、中盤のワンシーン。

人間が起こした戦禍から、必死に妻を護り、紅主が片腕を失うシーンだった。

「華那……華那……怪我は……ないか？」

疲労が浮いた顔で、それでも優しく微笑む。
擦れた声が戦火の凄まじさを表現していた。
擦れながらも良く通る、腹から響く声。

決して大声ではない。

だが、生徒会室にいる誰もがはっきりと台詞を聞き取れた。

紅蓮は青冥の頬にそっと右手を当てる。

「良かった……。お前を失う痛みに比べれば、この痛みなど……。」
思いやりに溢れる瞳。

そして、紅蓮は台本通り、許された右手で、きつくきつく青冥を抱き寄せる。

「きゃーっ」「きゃーっ」「いやーっ」

腐女子から黄色い悲鳴が上がった。

「……お前、まさか、台詞、今一回読んだだけで？」

「はい、台詞は大体一回で覚えます。英語の台詞だと、二・三回読まないとダメだけど。」

実力は、歴然。

「……紅蓮、コワイ子っ。」

佐奈は白眼を剥きながら、口元に手を持っていく。

「お前はアユミさんかっ!」

書記が再びツッコんだ。

どうやら二人とも、大河少女演劇漫画の愛読者らしい。

「よし、今年はイケるっ、イケるぞっ!」

一人盛り上がる佐奈。

「佐奈……佐奈……。」

それを、青冥の冷静な声が止めた。

「何で御座いましょう? 生徒会長どの?」

佐奈は仰々しくおどけてみせる。

「華那とは……女の役ではないのか?」

「だな。」

佐奈はきっぱりと肯定。

「私に……できるだろうか？」

不安げな青冥。佐奈はバンバンと景気良く青冥の肩を叩いて励ました。

「ダイジョウブだって。ほら、こーやって、髪を解ほどけば、そこいらの女よかよっぽど……」

佐奈は隙を見て、青冥の後ろに束ねられた髪を解く。

霊力の依代よりしろである、射干玉ぬばたまの髪が光を弾く。

一度肩で遊び。

さらさらと。

その白磁はくじの頬を彩った。

「……」

再び。

生徒会室が静まりかえってしまった。

当の佐奈もぽかんと口を開けたまま。

「……佐奈、お前、何赤くなってるんだ？」

会計にツッコまれようやく正気を取り戻す。

「とっ、とにかく、だ。主役は歴代の生徒会長が演やると決まってるんだ！ お前に選択権はミジンコないっ。それに、昨今さっこんのメイク技術ナメんなよ？ フツーのおっちゃんがおネエに変身できるんだからな。……紅蓮、お前、こっちも詳しそうだな？ よろしく頼む。」

とかく押し付け気味の佐奈だが、紅蓮はこちらも、快諾。

「解りました。一通りは勉強してるけど……。そうだ、セイさん、写メ、撮ってもいいですか？ メイクさんに見せて、アドバイスしてもらいたいんで。」

「ああ。紅蓮。構わない。」

紅蓮は直ぐにポケットから携帯を取り出す。

「何？ お前ら……いつの間にファーストネームで呼び合う仲になったんだ？」

佐奈のツツコミに紅蓮は余裕の笑み。

「ふふっ、ひ・み・つです。ね、セイさん？」

「いやゝっ、フケツよっ、破廉恥^{ハレンチ}よっ。お義父^{とう}さんはゆるさんぞっ！

ひとしきり、二人に絡んでから、佐奈は我にかえる。

「そうだった、馬鹿はこれくらいにして、この勢いで、次っ、台本^{ほん}読みいくぞっ。はじめっ！ 役ついてないヤツはみんな裏方な？」

佐奈の声に皆が集まり、読み合わせを始める。

一通り。流れを見守っていた佐奈。

すべて終わった後に。深い深い溜息。

「はあ……。なあ、聖^{ひじり}。その、完っつつ壁な棒読み、何とかならんのか？ 紅蓮相手だと、余計悪目立ちするんだよ！」

「……すまない。」

実力の差は明らかだ。青冥は素直に謝った。

「大丈夫ですよ。声は良く通るし、発音もハッキリしているから。」
何気に庇^{かば}ってくれる紅蓮。

「よし、聖^{ひじり}の演技指導は、今後、お前に一任する。……来週はまる一週間、実力テスト期間で練習できないし……。よっし、紅蓮、ここ二週間、昼休みも放課後も聖に張り付いて、徹底指導しろ。これは副会長命令だ。」

「えっ？ いいんですか？ セイさん……。」

流石に青冥の了解を取る紅蓮。

「いい。俺が許す。拒否権は聖にはない！」

青冥よりも先に佐奈の許可が下りてしまった。

「はいはい。他にも役ついたヤツは週末明けまでにセリフ覚えて来いよ？ 次は立ち稽古^{げいこ}だからな。他は、自分が何やるかてきとーに決めといてくれ。じゃ、解散っ。」

ガタガタと席を立ちは始めた皆に佐奈は思い出したように呼び止める。

「ああ、そうだ。」

足を止めた皆に、佐奈は

「宿題やっつけよう」更に、「歯磨けよっ!」「も、いっちょ、風呂入れよっ!」

「あゝはい、解った、わかったから。」

あからさまに薬物ハイの佐奈を書記と会計が責任を持って撤収。

「頭洗えよ〜」

佐奈の雄叫びが廊下に響いた。

それ以来。佐奈の言葉通り、校内イタルトコロでひつつき虫の紅蓮の姿が見られるようになった。

そして、今日は、晴れてテスト明けの週末。

場所は、いつもの主桜の横の広場。

すっかり二人の定位置になってしまっていた。

佐奈の台本通り、呪木との噂もあって。

昼間でも好んで近づくものは少ない。

つまり、劇の練習には持って来いだった。

何より、昼休みには必ず、青冥の姿がここにあった。

昼休み。紅蓮は青冥めがけてBダッシュで校庭を駆け抜けていく。

青冥は……今日も高い梢こすえを見上げている。

その蒼いあおほどもに黒い瞳は、憂色ゆうしよく。

皐月前の青い空と、木漏れ日。

紅蓮はしばらく、青冥の瞳に映る色を見つめていた。

「紅蓮……」

ようやく、青冥が気づく。

「セイさん、この木、気になるみたいですね?」

「ああ。」

短い答え。

青冥の瞳は優しく、哀しい色のまま。

「……何だか、だんだん元気が無くなっていくみたいだ。」

紅蓮は桜の幹をそっと撫で撫でした。

陽ひの光が強さを育はぐくむように。

紅蓮の手からあたたかい火気があふれる。

これもまた、彼は、無意識。

ああ、そうか。

彼は、『鈍い』のではない。

清いのだ。

独り。納得する青冥。

「セイさん、お昼、まだですよね？」

桜に元気を分け与えた事など、微塵も気づかず、紅蓮は明るく笑う。

「ああ。ここにある。」

青冥は牛乳パックを差し出した。

「また、それだけ？　ですか？」

「ああ。呪や術を使う時は食べない。」

「ジュ？　ジュツ？」

『くう？』子犬がそうするように。

紅蓮は不思議そうに小首を傾げる。

他に説明するうまい言葉が見つからず。

青冥は陰陽師用語をさらりと口にする。

向けられるのは、好奇の瞳か、異端視か。

こんな事は慣れている。

青冥は覚悟を決めた。

「その『呪』は終わっただんですか？」

そのどちらでもなく。紅蓮はそう問う。

「ああ。」

彼の問いに、安心して自分のいる。

「じゃ、一緒に食べられますね？」

紅蓮はにこりと笑うと、迷彩柄のディパックから、次々にパンを取り出して店開き。

「おやつの分も、と思ってたくさん買ってるんで、良かったらどうぞ。」

焼きソバパンに始まって、チョコドーナツ、マヨコーンパン、ソーセージロール、カレーパン、うぐいすパン、チーズ蒸しパン……。言葉通り。購買の人気パンシリーズが、出てくる、出てくる。

「いや……私は……。」

「えっ？ 今日も食べないんですか？」

みるみる、耳がしおれる。

「そんなの、身体に悪いですよ。ねっ？」

やわらかい、思い遣りの言の葉。ことは

だが、有無を言わせぬ、強い言霊。ことだま

青冥は自分でも知らずに微笑んだ。

「わかった。食べる。だが、お前のおやつが無くなっては申し訳ない。何か買って来る。」

「あ、セイさん、もうナイんじゃないかな？」
確かに。

昼休みが始まって、早二十分過ぎ。

戦々恐々たる購買という名の最前線は。デッド・ライン

今は、兵どもが夢の跡だろう。つわものあと

しかし、あの死線をかいくぐり、購買のベスト5に収まるパン総てを奪取するとは……。

しかも、中等部で。

紅蓮はお坊ちゃん然とした見かけとは裏腹の、宿した火気通りの猛者らしい。もさ

「僕と一緒に食べたかっただけだから。どうぞ？」

中であっさりめのうぐいすパンと、チーズ蒸しパンをそつと青冥に差し出す。

どちらも、青冥が好きなパンだった。

勘も鋭いらしい。

「ありがとうございます。」

手を合わせ、礼を取る。

青冥はゆっくりとパンをほおばった。

が。半分も食べない内に止まってしまう。

「？ セイさん？」

「……すまない。もう、食べられない。」

青冥は申し訳無さそうに俯いた。

「じゃ、僕が貰いますね？」

返事を待たずに、紅蓮は青冥の手にあるパンをかぶり。

驚く青冥に、紅蓮の悪戯な茶色の瞳が絡む。

……本当に犬に餌を与えている気分だ。

「おいしい。」

紅蓮はとうとう、青冥の手から全部パンを食べてしまった。ついでに、彼の手に食べこぼしてしまった餡も、ぺろりと嘗める。

「……あの……すみません。」

らぶらぶ（？）な二人の間に、申し訳なさそうに女子の声が割って入る。

彼女は、確か、今年のミス櫻華台候補。

「聖先輩、ちょっといいですか？」

「何だ？」

何の関心も示さず。青冥は立ち上がった。

「あの……聖先輩、後夜祭のprom、もうお相手は決まってるんですか？」

この学校には、後夜祭のpromは女性から誘うしきたりがあった。その後、付き合い始めるカップルも多い。

女子にとって、バレンタインの本命チョコと同じ重みと意味があった。

彼女は、横にいる紅蓮を気にして頬を赤らめる。

「いや。」

青冥の答えに女子の顔がぱっと明るくなる。

なぜか、紅蓮も。

「じゃ、もし良かったら、私と……」

期待に満ちた瞳を受け、青冥は深く溜息をついた。

「……私は、お前の想いに応える事はできない。誘うなら、他の者を誘った方がいい。」

完膚無き冷たい拒絶。

「……っ……」

彼女は泣きながら校庭を駆け抜けていった。

青冥は何事もなかったかの様に隣に座る。

その整った横顔からは、感情は読めない。

「……セイさん……」

気まずい沈黙を紅蓮が破った。

「今、付き合ってる人とか、居るんですか？」

「いや、いない。」

「……そうですか。」

何だかほっとしたような……。

紅蓮は何とも言いようなない表情かおをする。

「じゃ、練習、始めましょうか？」

紅蓮は昼休み終了のチャイムが鳴るまで、いつもの様に熱心に指導してくれた。

放課後。

生徒会室入り口で、青冥は突然、凄まじく厄介な背後霊にとり憑つかれる。

「♪うらみくまうすう♪」

その背後霊は、古い歌を歌いながら、青冥に憑依し、力づくで廊下の端まで連れて行く。

「佐奈？」

青冥はズバリ、背後霊の正体を言い当てる。

人目につきにくい非常階段まで行って、その背後霊はようやく青冥から剥はがれ落ちた。

「お前……梓あずさちゃんあずさだったってな？」

眼鏡越しの恨みがましい眼見ガンミ。

「一体、梓ちゃんのどこが不満だ！ 可愛いし、性格もいいし。しかも、彼女から誘われるなんか、羨まし過ぎっ！ なのにつ、なのになのにつ！ ファンクラブ会長としてはだな、梓ちゃんをつった理由を二十文字以内で、かつ、俺が納得いくように説明して貰おうか。あっ、さあ、さあ、さあさあさあさあ。」

歌舞伎のように見得を切り、詰め寄る佐奈。

青冥はポツリと言葉を落とした。

「……女人にょにんは穢けがれだからだ。」

「はっ？ なっ……。」

余りの言葉に佐奈は絶句してしまふ。

「何か……良く、解らんが……。陰陽師おんみょうじってのも大変だなあ。」

逆に、同情されてしまった。

「ま、いい。とにかく、今日は立ち稽古げこだからな。……頼んだぞ、華那姫かな」

監督の言葉通り、その日は、生徒会室廊下側が上手。ベランダ側を下手として。

簡易舞台で初の通し稽古となった。

「おい、紅蓮っ、お前、この二週間、聖ひじりに張り付いて、一体何やってたんだっ！」

佐奈監督は、終わった途端、丸めて握り締めていた台本を紅蓮に投げつける。

紅蓮はひよい、とその台本を避けて、しれっと答える。

「え？ でも、身のこなしは完璧だと思うけど。」

「ああ、すげえ。あの聖がちゃんと女歩きしてるし、立ち居振る舞いも完璧なお嬢様っ！カンジだ。だがなっ」

佐奈は椅子から立ち上がった。

その勢いで、監督椅子がひっくり返る。

「更に台詞の棒読みが際立ってるだろうがっ。お前、本番まで後一週間程しかないんだぞ！ どうしてくれるんだ！ 紅蓮っ！」

「佐奈、紅蓮は悪くない。私が悪い。」

非は自分にある。青冥は素直に謝った。

「セイさんだって、頑張ってます！それに、後一週間あるんだっ
たら……」

美しき庇^{かば}いあいを見せる二人。

佐奈は深い溜息をつく。

「本当に何とかできんのかよ？ 学校は今日までしかねえんだぞ？

そうだ、紅蓮。この週末、聖^{ひじり}の家で強化合宿だ！ 幸い聖はひと

り暮らしだし。月曜^{リハーサル}日まで何とかしとけよ！」

「えっ。……いいんですか？ セイさん。泊まりに行っても……。」

流石^{さすが}に、今回は直接青冥本人の許可を取る。

「ああ。お前さえ良ければ、私は構わない。……手伝ってくれるか
？」

「解りました。絶対、頑張りますよう！」

紅蓮は満面の笑みで青冥と握手した。

第二章 はなのいろは（前書き）

前回の続きです。ルビのタグ打ちに四苦八苦していますW
頑張ります。

第二章 はなのいろは

その日、学校が終わってから二人は最寄の駅で待ち合わせた。駅から歩いて十分程で青冥の家へと着く。

閑静な住宅地の入り口近くに、長寿アニメに出てきそうな木造の平屋があった。

引き戸の玄関がその家の歴史を語る。

こじんまりとした庭へのアプローチ。

奥に小さな小さな竹林が見える。

青冥は黙ってその玄関の鍵を開けた。

紅蓮を真っ直ぐに奥の座敷に案内する。

玄関の垣根からもちろと見えた庭が、座敷の周り廊下からぐるりと見渡せた。

決して広くはないが、奥行きを感じさせる。

青冥が開け放した窓から、竹林で濾過ろかされた爽やかな風が入る。

「いい部屋ですね。何か……おばあちゃん家に帰ってきたみたいだ。」

掛け値のない賞賛。

紅蓮の言霊は真っ直ぐで心地良い。

早速、荷物を置いて。

二人はそのまま座敷で稽古に入った。

『台詞に抑揚をつける』

今回の合宿の最大の御題テーマだった。

一度、紅蓮が口にした台詞を青冥が倣ならう。

「主様、私の所為わたくしせいでそのようなお姿に……」

台詞の最後の方、紅蓮の声は涙に震え、袂たもとを目元にもって行く。

それだけで、涙が零こぼれている様に見える。

いつも思う。

これがプロの演技というものか。

「ヌシサマ、ワタクシノセイデ、コノヨウナオスガタニ……」
この台詞で、初めて舞台で紅主と二人きりとなる。最初の見せ場
だった。

「……もう一度、演りましょうか、セイさん。」

動作の演技の時と同じく。紅蓮は何度も何度も、同じ台詞を熱心に繰り返す。

だが……。改善は、難しい。

「……少し、休憩しましょうか？」

三十分程ひとつの台詞を集中指導した後、紅蓮はにこりと笑った。
「……すまない、紅蓮。」

麦茶と茶菓子を紅蓮に出しながら、青冥は深い溜息をついた。

「大丈夫ですよ、セイさん。まだ、一週間もあります！ でも、どうやったろうまくいくのかな？ 動作の演技はあんなに上手なのに……」

紅蓮は珍しく真顔で考えこんでしまう。

「本当に済まない。」

青冥はもう一度、深く溜息をつく。

理由は、解っている。

これ以上、彼を失望させたくなかった。

「いくら練習をしても、恐らく、無理だ。」

「セイさん？」

伏せた瞳に、紅蓮の強い茶色の瞳が絡みつく。

「……私が陰陽師おんみょうじなのは知っているな？」

「はい。」

紅蓮はこくりと頷うなずいてみせる。

「……私の言葉使いはおかしいだろう？」

答え辛い質問づらをずっと聞く青冥。

「同じ年の人とは少し違うかも。」

紅蓮も言葉を選びながらも、素直に答える。
だからこそ、彼を信用できる。

「紅蓮、『言靈』は知っているか？」

「言葉には、力があるって事でしよう？」

簡潔。だが、的確。青冥は頷いて続けた。

「陰陽師は『言靈』で呪や祝、術を操る。だからこそ、私は口語で崩された現代の日本語を使う事はできない。ましてや、自分の感情ですらない言葉を操れば、それは『虚』となり、私は言靈の力を失う。」

「……。じゃ、セイさんが僕の事を好きになってくれれば、言靈は本当になるんですね？」

紅蓮はそう言って、茶色の強い瞳でじっと見つめる。

「私は、お前の事は、好きだ。」

青冥はさらりと事実を告げた。

嘘をつけない、青冥の言葉。

「えつつ？　じゃ、じゃあ……。」

幻の尻尾が千切れんばかりに振られている。

「だが、華那のように愛してはいない。」

「……そう……ですよね。」

珍しく、紅蓮の火気が萎れてしまう。

陰陽師として人間の子。複雑な思考までは読み取れない。青冥は劇の事だと勘違いした。

「楽しみにしていたようなのに、すまない。これ以上は無理だと、月曜日に佐奈には私から説明しよう。」

だが、紅蓮は考え込んでしまった。

「……例えば、セイさんが僕の言靈をそっくり真似る事は出来ませんか？　それだったら、セイさんの言葉ではないから……。だって、動作の演技はあんなに上手に真似できるのに……」

「動作は……舞を覚える要領で覚えた。お前が丁寧^{ていねい}に教えてくれたお陰だ。だが、言靈は……。流れる。留まらない。一度は真似出来たとしても、二度目は無理だ。何度も繰り返す事は出来ない。」

「そう……ですか。ごめんなさい。」

萎れたままの耳で、紅蓮はぺこりと頭を下げる。

「なぜ、お前が謝る？」

「僕、あんまりお役に立てなかったから……」
耳も尾っぽもしおしおだった。

「言霊を留める事が出来ればいいのに……」
溜息交じりで紅蓮がぽつりと呟く。

「……」

今度は青冥が考え込んでしまう。

「言霊を留める、か。出来なくは……ない。」

「えっ？　できるんですか？」

紅蓮の耳と尻尾がぐん、と持ち上がる。

「出来なくはないが……」

その方法が。

紅蓮の瞳が期待に輝く。

「どうしたらいいんですか？」

また、この期待を裏切る事になるのだろう。

「言霊が消える前に、口伝で伝えたらいい。」

「くちづてって？」

「つまり、口づけの事だ。」

『本気ですか？』

大きく見開かれた茶色の瞳が、そう語っている。

「いや、いい。忘れてくれ。」

紅蓮の当然の反応。青冥は微かに自嘲した。

「セイさんは……嫌じゃないんですか？」

そう言って、紅蓮は青冥の蒼い黒瞳の中の真実をじっと覗き込んだ。

「いや。嫌ではないが……。お前こそ、嫌ではないのか？　男同士で口づけなど……」

「イエ、セイさんがイヤじゃなきゃ、僕はイイですよ？」

意外な答えをききやると明るく答える紅蓮。確かに、役者なら

ば、意に染まぬ相手とのキスシーンもあるだろう。

それともこれも『欧米化』というものか？

「じゃ、早速やってみましようか？」

紅蓮は麦茶を美味しそうに飲み干してから、にっこり笑うと立ち上がった。

「どうやったらいいですか？」

青冥も立ち上がりながら答える。

「華那の台詞を言霊に変えた後、私に口伝てくれないか？」

「解りました。じゃ、どこからいきますか？」

紅蓮は台本を開いてにこにこ。

「さっきの所から？ それとも、初めから？」

「初めから……いいだろうか？」

全く自信のない青冥は、控えめに答える。

「じゃ、冒頭の結婚式からでいいですか？」

青冥はこくりと頷いた。

「……久遠に誓います……」

華那の最初の台詞を演技して。

その唇で紅蓮はそつと青冥の唇に、触れた。

少し冷たい、形の良い薄い唇。

紅蓮の男らしい厚みの唇から、あたたかい言霊がなだれ込む。

男の唇から発せられたとは思えぬ、優しい、女性の言霊。

それは、限りなく真に近い偽。

役者の言霊とは、こんなにも……。

「どうですか？」

心配そうに覗き込む紅蓮。

「……演じてみなければ、解らない。」

青冥は正直に答える。

「……では、華那よ。汝は彼の者と妹背の契りを果たすや？」

紅蓮は一つ前の、桜木の翁の台詞を上手に引用する。

「……久遠に誓います……」

先程、紅蓮の演じた、恥じらいと緊張の間も完璧に……その言霊
は青冥の声で再現される。

「凄いや、セイさんっ、カンペキです！」

紅蓮は驚いて青冥を思わずハグ。

青冥は自分でも驚きながら少し照れる。

「お前の言霊が真に近いからだ。お前の、功だ。」

「でも、それを再現できるセイさんも凄いと思います！」

紅蓮は喜びに輝く強い瞳でしっかりと青冥を見つめる。

「次も、どんどんいっちゃいましょう。」

雛に餌を運ぶように。

紅蓮は何度も言霊を青冥の唇に運んだ。

ストーリーは中盤。二人だけの舞台。

あの、紅蓮が初日に皆に演じてみせた、妻を庇って片腕を失う重
要なシーン。

「華那……華那……怪我は……ないかな？」

「主様……。主様……。私の所為でこのようなお姿に……。」

三十分かけても改善出来なかった台詞。

だが今回、青冥は詰まる涙声まで再現する。

紅蓮はにこりと笑って、役に入った。

「良かった……。お前を失う痛みに比べれば、この痛みなど……。」

紅蓮の背は青冥と同じくらい。

だが、青冥よりはずつと逞しい肩が震える。

台本通り、紅蓮はきつく青冥を抱きしめた。

「主さま……華那は……華那は、主様をお慕い申し上げます。」

このシーン最後の、華那の重要な台詞を、紅蓮は口伝る。

もう何度目の口伝か。

くちづけが。

回を追う毎。

熱く、深く。

時には舌先が触れ合う程に……。

紅蓮は、気づいているのだろうか？

「主さま……華那^{かな}は……華那は、主様をお慕い申し上げております。」

青冥の唇から、自分とは真逆の。

伝った紅蓮の火の気が、言霊^{ことだま}となり。
爆ぜる！

「華那っ、愛して、いる！」

腰にきつく。

回された紅蓮の腕から殊更^{ことごと}に強い火の気が。
花火のように弾けた。

「……っ、はっ……」

青冥は堪らず、溜息をついてよろめく。

「セイさん……」

紅蓮はそのまま抱きしめ続けた。

白磁の頬は、出会った時の背景と同じ。

桜の色に染まり。

奪い続けた青冥の対^{つひ}の花弁^{はなびら}は、やわく綻^{ほころ}び。
更に自分の名の色に染めよ、と紅蓮を誘う。

「ぐっ、ぐれん？」

余りに強く、永い抱擁。

青冥の細い腰から、戸惑いの色が伝わる。

「あっ、スミマセン。痛かったですか？」

「いや。ただ……お前の火気に当てられただけだ。」

紅蓮はまだ少しふらつく青冥の身体を支え続けた。

「！」
偽りとは言え、綴^{つづ}る愛の言葉。

度重なる口づけ。

腰が触れあう。

「！」

紅蓮の若い身体が、反応、する。

「もう一休み、しましうか、セイさん」

紅蓮はすっと青冥から身体を離れた。

「……僕も頭、冷やして来ます。」

何だか複雑な表情で庭に降りる紅蓮。

夜風が涼しそうだ。

遅咲きの庭の八重桜は五分咲き。

空には、欠けゆく月。

三日後にはもう。

下弦が張り切ってしまうだろう。

紅蓮ひとり居るだけで。

見慣れたはずの庭の景色が違って見える。

青冥は廊下から黙って月を見上げた。

「……月？　どうかしたんですか？」

つつかけた下駄を鳴らしながら、紅蓮は青冥と同じく月を見上げる。

「今日は、このくらいにするか。明日もある。風呂を沸かしてこよう。」

青冥は高い月で時刻を知る。

その日はそれで、お開きとなった。

また、週が明け。

放課後の体育館。今日は衣装まで併せて。

本番さながらの舞台でのリハーサル。

メイクや着付けで走り回っていた紅蓮が、ようやく控え室に戻ってくる。

紅蓮は猩々緋の衣。蘇芳に黄桜の金糸の縫い取りのある水干。漆黒の袴。

対して。

青冥は浅葱・雛鳥・雪白の略式重ね。

まさに。桜色からいろもの唐衣。

「紅蓮……」

椅子に一人、ぽつんとひとり、座る青冥。

その瞳はいつになく心許こころもとなし。

「遅くなってしまうってすみません、セイさん。お化粧、しまし
ね。」

そう言って、ぶら下げて来た、水彩道具の様なメイクセットを開
いた。

「痛かったら、言って下さいね」

青冥の綺麗な髪を梳とかし。髭かもしをつける。

クリップで前髪を留めてから、紅蓮は眩くらく。

「セイさん。眼めを瞑つぶってもらえますか？」

素早くスキンケアした後、白磁の頬にドーランを塗る。

形の良い眉は、整える程度。

衣装よりはやや薄い、桜色のシャドウ。

切れ長の瞳に添って、古風な緋色のラインを目尻に入れる。

ビューラー要らずの睫まつげには、より、印象的にストレッチマスカラ
を。

「セイさんは素材がいいから、逆に大変。」

そう言いながら丁寧に、シャドウよりもやや濃い、桜色ルージュの紅を取
り出す。

青冥の顎あごを取り、うつすらと開いた対の花弁はなびらに。

紅筆で花に相応ふさわしい色を乗せていく。

仕上に指に取ったパウダーで淡く紅をぼかす。

指に少し冷たい、露を帯びた花弁はなびら。

この感覚……。知ってる。

もう、何度摘つんでしまったのだろう。

この柔花やわはなを。

何度摘つんでも瑞々みずみずしく。

この対の花弁ついはなびらは、そこに、ある。

「紅蓮……」

その花卉が開き、名を呼んだ。

「セイさん……。」

紅蓮は泣き出す前の様な。何とも言えない顔をして、じっと青冥を見つめる。

紅蓮も不安、なんだろうか？

「……大丈夫……だろうか？」

ひとり。居た時と同じ、不安^{ふあんげ}気な瞳の青冥。

「大丈夫ですよ。見てみます？」

紅蓮は前髪を手早く直すと、手鏡を渡す。

「綺麗ですよ、とっても。」

手鏡の中の紅蓮と眼^めが合う。

鏡に映るのは、見た事もない自分の顔。

「……よく……解らない。」

そう言って、青冥は瞳を伏せた。

「大丈夫ですよ。僕は、カンペキな演技だと思えます！」

強い瞳でしっかり青冥を抱く紅蓮。

不安が、ゆっくり蕩^{とろ}けていく。

「……なあに今から雰囲気出して見つめ合ってるんだよ？」

そこに佐奈大監督がなだれこんできた。

「ほら。リハーサル、始めるぞ。いいな？」

二人が全く同じタイミングで頷^{うなず}くのに軽く呆れながら、佐奈は叫んだ。

「アクション！」

戦い済んで日は暮れて……。

「我が心の友よっ、んゝちゅ、んゝちゅ。」

劇が終わった途端に、佐奈が舞台に乱入。

二人を抱きしめ変わる変わるほっぺちゅー。

「お前はジャイアンかつ！」

会計のツツコミをモノともせず、佐奈は上機嫌で紅蓮と青冥、二人と肩を組んだ。

「いやあ、やっぱスゲエ、紅蓮。一時はどうなる事かと思ったが、いやあ、天晴れっ！」

「セイさんの実力ですよ。」

首に佐奈をぶら下げながら、紅蓮はさらりと青冥に花を持たす。「いや。紅蓮の協力のお陰だ。私は何もしていない。」

青冥は事実を述べた。

「……お前ら、ますます仲良くなってね？ でも、紅蓮、本当にここ三日で、あの棒読みな聖を良くここまで……どうやったんだ？」

「それは、ヒ・ミ・ツです。ね、セイさん？」

まさか、口伝を言う訳にもいかず。

紅蓮と青冥の視線が一度絡み、青冥はくすりと綺麗に笑った。

『もしかして、微笑み返し？ ああ、聖が？』

……何だか、気に食わない……。

「なッ、何よっ、二人してアタシを除け者にしてっ！ 紅蓮、アタシ、あんたなんかには負けないんだからっ！」

そう言っただけで冗談半分で青冥を抱きしめる。

華奢だとは思っていたが……。

着物の下の腰の細さを始めて思い知った。

メイクしているとは言え滑らかな雪白の肌。

戸惑いがちに伏せられた長い睫毛が影を作る。

お気に入りの黒曜石の瞳と対の射干玉の髪。

何より、桜色の唇……。

どきっ。心臓が、跳ね上がる。

『どきっ？ どきって何だ、俺の心臓！』

「佐奈、なあに女装聖に赤くなってるんだよ」
書記が目ざとく見つけてツツコんだ。

『そんな、馬鹿なっ！』

怖いもの見たさのような。

そんな気持ちで聖の顔を再認識する。

「佐奈？」

抱き締め続ける腕の中、青冥が佐奈を見上げた。瞳が、絡む。

「！」

その、不安気な瞳……。一生、護ってやりたい……！

『ん？ んんんんんっ？』

「いやあ、おかしいわっ、アタシっ！ 甲斐っ、迷わず俺をブツてっ！」

びたん。凄まじい音が体育館に響き。

舞台にすっ飛ぶ、ペンと、眼鏡と、佐奈。

頬には季節外れの真っ赤な紅葉。

「ってえな。本気で殴るこたねえだろっ！」

当然の非難に有能な書記は済まして答えた。

「恩人に何言ってやがる！ 人道踏み外して、ホモ道に片足突っ込んでいたくせに！」

「ホモ道って何だ、ホモ道って！」

猛反対する佐奈を冷たい書記の視線が貫く。

「いつまでもスケベの中年親父みたくなやケ面で聖抱き締めてるヤツが良く言うぜ！」

「わあっ！」

事实に気づき、叫ぶ佐奈。

慌てて、聖を突き放そうとした。

嫌だ、もう、離したく、ない！

だが、腕は青冥の体をきつく抱き締めた。

「うわあ、何だ、何だ、おかしいぞっ、俺っ！ 俺が好きなのは梓ちゃんのはず。これは、一時の気の迷いだ！ 気のせいだ！ そうだろ？ 聖、そう言ってくれっ！」

パニクる佐奈。青冥は冷静。

「……気の迷いだ。」

青冥は、冷たい白磁の二本指で、佐奈の額に触れた。

ふっ。

短く、吐息が漏れる。その眉間には深い皺。

「……何か……つかれた。^{ドット}疲れた^{アット}@佐奈。ふぁい、今日は、終わり。各々片付けしたら解散っ！」

欠伸^{あくび}交じりで解散を告げる佐奈。

片づけが終わる頃には真っ暗になっていた。

「あれ？ セイさん？ セイさんは？」

ご主人様の姿が見えない事に気づいた犬が、^{ゴールデン・レトリバー}慌てて姿を探す。

「さつきそっちで着替えてなかったか？」

佐奈は舞台袖を指差した。

紅蓮は慌てて暗幕を開け、電気を点ける。

衣装は、ハンガーに。制服も、ハンガーに。

荷物は、ある。青冥は……いない。

今朝、青冥が持ってきたサブバッグの中身がなくなっている事に

紅蓮は気づいた。

「居たか？ 紅蓮？」

佐奈が準備室を覗きこんで来る。^{のぞ}

「いえ……。」

紅蓮は首を振った。

ぽつん。不安が小さな心の染みとなる。

その染みは、みるみる広がり。

外と同じ、濃い闇色に染まっていく。

紅蓮はポケットから迷彩柄の携帯を出す。

「げっ、お前、聖待ち^{ひじり}受けにしてんのか？」

何気に覗き込んでしまった佐奈がそう絶句。

「僕、役にハマりこむタイプなんです。」

紅蓮はすまして答えると、青冥の携帯を鳴らした。

ヴヴヴヴ。ヴヴヴヴ。

空しく、床に響くバイブ。

心の闇は喉から苦い唾となって込み上げてくる。なのに、やけに

喉が、渴く。

嫌な予感が、する。
堪らず。紅蓮は校庭に飛び出した。

青冥は、誰にも告げず、夜の校庭に居た。

空には下弦の月。まだ低い位置に月は在る。

だが、もう待てなかった。

月の光に陰陽師の装束が白く浮く。

水浅葱の水干。真白の袴。青冥の本性の色。

風師が袖を引きとめる。

だが、青冥は構わず主桜へと進んだ。

最早、色を失った桜。

散りゆく花卉すら色褪せ、弱く萌黄を纏う。

「……そこに、居るのだろうか？ 出て来い。」

青冥は桜木に向かって静かに囁いた。

ざわ。

答えは、風。

「……わかっている、出て来い。」

声は静か。だが青冥の指先から染みる水気。

半落ちの月に……桜木の幹から浮かぶ、姿。

「何用だ？」

闇色の衣。闇色の袴。紅の狩衣も。

袖下からじわり、墨染めへ。

「紅主……」

青冥の眉が顰まる。

「なぜだ？ なぜ魔道に堕ちた？」

愁眉のまま、冷たい青冥の声。

「……佐奈に憑いて、どうするつもりだ？

をするつもりだった？」

あんな台本を書かせ何

「陰陽師殿……私は……。」

紅主はくぐもった声で声で答える。
魔の支配は濃い。

「お前には聞いていない。」

青冥はその澄んだ瞳で幹の成す影を射抜く。

「……」

答えは再び、風。

「隠れても無駄だ。解っている。出て来い。」

青冥は幹に張り巡らせた術、水系を手繰る。

ずわり。

幹よりも濃い影……いや、闇が蠢く。

闇色の影は、やがて人型を模った。

まさに闇色の……傀儡。

「良く俺が解ったな。流石は『稀代の陰陽師』殿。」

闇色のフードから彫深い浅黒い顔が浮かぶ。

禍々しい気。

だが、人間の瞳は、その異形を。

『美しい』と認識してしまう。

傀儡の口元が赤黒い笑いで裂ける。

「……どうやって魔に堕とした？」

青冥は鋭く、核心を突く。

「堕とした？ 人聞きの悪い事を言うな。こいつが望んだ事だ。こ

いつの内なる切望を、俺が、叶えた。」

陶醉する傀儡。下級の西洋魔物にありがち。

寄生型か。

青冥は冷静に判断する。

「で？ 俺を『御祓い』するつもりか？ オエラい陰陽師サンよ？」

青冥を若いと見縊ったか。

傀儡の言の葉の端々に、小馬鹿にした態度が滲み出る。

「……祓いなどしない。切る！」

『切る』とは、即ち、『斬る』。

「FLAME！」

隗魔の絶叫が暗闇に響く。

地面に赤黒い炎が走り、青冥を取り囲んだ。

「黒魔法か。」

見立て通り。

青冥は袖で湧き上がる黒炎を避けた。

隗魔の口。

火の色と同じく、赤黒く笑いの形に裂ける。

「くくくつ。苦手なんだろう？ お前等、陰陽師は。はははっ、燃や

し尽くせ！ はははっ」

隗魔は勝利に酔った。

「高天原に神坐ります龍王の名に於いて遣ひ給ふ。疾く来よ。来りて炎禍の穢れを祓い給へ、清め給へ。」

現世ならぬ黒い魔炎の中から。

青冥の良く通る声が月明かりに響く。

やがて……。

さあーっ。

現世のものならぬ優し雨音。

隗魔の生んだ魔界の黒炎は。

陰陽師が呼んだ天水に消されていく。

「なっ、何故だっ？ 西洋魔法は苦手のはず……。」「

火蜥蜴眷属。

自分の最高位魔法を破られ、狼狽する隗魔。

「水克火。洋も和も、理は変わらない。私の術力がお前の術力に勝

った。それだけだ。」

青冥の言葉に驕りはない。

純然たる事実。

「クッッ……。」

隗魔は屈辱に喉を鳴らす。

「水気よ。集いて刃と成せ。水神刀。」

青冥の左手。

いつもは制服の下、瑠璃の宝珠から。

細身の刀が現れる。

水気の凝った氷の性の刃。

青冥はぴたりと隗魔の首筋に刀を当てた。

正に氷の冷たさの刃が冴え冴えと喰い込む。

「まっ、待てっ、何が望みだ？ 見逃してくれたら、お前の望みを

叶えてやろう。」

魔物の常套手段。

「お前に叶えられる望みはない。切る！」

冷徹な答え。

「ひっ、ひいっ。」

隗魔の情けない悲鳴が桜の梢に響いた。

「おっ、おいっ、何とかしろっ！」

藁をも掴む。

隗魔は呆と横に立つ紅主へと声をかけた。

精霊は、聖霊。

本来、精霊は魔にも人にも与さない。だが。

「……」

紅主はゆるりと、地面に手を翳した。

ぼこっ、ぼこぼこっ。

桜の根が。地と、理を離れる。

「！」

そのまま、青冥の手足に巻きつき、青冥を締め上げた。

「……何故だ、紅主！ お前には、深い哀しみしか感じられなかった。」

だがからこそ、体内に水系を張り、彼を癒し、慰めた。

青冥は桜木の精を見つめる。

精霊は、即ち、聖霊。

聖性を失えば、妖と成す。

これが、聖性と引き換えに手に入れた力か。

「陰陽師殿……私はただ、立ち待つ事に疲れ果てたのだ。」

紅主はくぐもった声で答える。

「よし、良くやった。こっちに来い。」

危機一髪。難を逃れた傀儡魔が紅主を呼ぶ。

紅主はただ、今の主に従った。

「いい子だ、紅雨。」

傀儡魔は紅主の黒髪をぐい、と掴む。

そして、これ見よがしに唇を奪って見せた。

魔の口付けは、支配の証。

じわり。

紅主の袖が、更に地から染みる闇に染まる。

「名まで……捕られたか！」

青冥は美眉を寄せた。

「さあ、紅雨。もっと締め上げてやれ。」

「……はい。」

意思の無いくぐもった言霊。精気のない瞳。

魔の支配は濃い。

紅主は再び、地に手を翳した。

根は……膝下から太股、両の手首から二の腕まで這い上がり、青

冥の身体を戒めた。

「止水糸。」

青冥は僅かに動く白磁の指先で、紅主の内、張り巡らせた水系を手繰る。

ぎざぎざ……。

力は、五分。根はそれ以上の動きを止めた。

だが、それだけだ。

癒しの術は攻撃など出来はしない。

それは、青冥が一番良く知っていた。

「……いい格好だぜ。オンミョウジドノ」

にじり寄る傀儡^{かいま}。

青冥の頬に黒い爪を伸ばす。

「やめろ。」

ただひとつ。

動かせる首を捻^{ねじ}って、青冥は抵抗を試みた。

黒い爪が白磁の頬に食い込み。

やがて、ぽつりと血色の玉^{ぎよく}になる。

「水を操^{あやつ}る陰陽師^{おんみょうじ}か……」

黒爪から、陰の気が入^いり、染^しむ。

「触れるな！」

真逆の陰の気。白磁の肌がざわついた。

「おキレイなお前には、俺の炎はキツいだろう？」

傀儡^{かいま}の情念。

赤黒い炎となって青冥の体を嘗^なめ、上^{のぼ}る。

とうとう。

青冥の手にある水神刀は、形を失い、手首の瑠璃玉^{るりぎよく}へと戻った。

「くっ、くくくくく。形勢逆転、だな。」

刀が消えるのを見計らって。

傀儡^{かいま}はその唇を強引に重ねてきた。

「う……。」

くちづけは、支配^{あかし}の証。

唇からは、より濃厚な陰の気がなだれ込んでくる。青冥は歯を食

いしばり、耐えた。

白磁^{ビスクドール}の整った顔が歪^{ゆが}む。

「いい表情^{かお}だ。」

その表情はさらに傀儡^{かいま}を煽^{あお}った。

「ん……。あ？」

もう一度、唇を重ねた傀儡^{かいま}が、ふと離れ。

小さく舌打ちした。

「チッ、何だ、初めてじゃねえのか、使えねえ！　　ったく、最近の

子供はよ。」^{ガキ}

無垢ほど穢しやすい。^{むく けが}

青冥は心から紅蓮に感謝した。

「だが……こっちはどうだ？」

隗魔は唇に執着する事をやめた。^{かっこ}

青冥の滑らかな首筋から、胸元に手を滑り込ませ、奥に息づく胸の花を探る。

「！ やめろっ！」

陰の気の穢れに、白磁が危険だと波打つ。^{けが}

「ほお……」

隗魔は青冥の水干の胸元を引き千切った。^{かいま}

黒い手が白装束の胸元をはだけさせる。

淡い月光に、まぶしいほどに浮かぶ、白磁。

頬……唇……首筋……そして、胸元。

隗魔は白磁を指でなぞる。^{かいま}

「……ぐっ……」

陰気は淫気。

噎せ返るほど、濃厚。^む

青冥はただ、耐えるしか出来なかった。

隗魔はそれを楽しむように、指で伝った通りに唇を這わせた。^{かいま}

唇の痕に赤黒い炎が燃え上がる。

「触れるな、穢らわしいっ！」^{けが}

青冥はおぞましさに思わず叫んだ。

思った通りの反応。隗魔は確信する。^{かいま}

「……こっちは初めてだな。」

手に吸い付く様な。

青冥の独特の冷たい白磁の感触。

「……俺を脅した罰だ。夜は永い。楽しませて貰うぞ。たっぷり、な。」^{おど}

隗魔の不快な温かさの手が、ゆっくりと身体を這い下りていく。^{かいま}

だが……。

「邪魔だ、退けろ、間抜けめ！」

怒号が闇に響いた。

皮肉にも、紅主の根が青冥の身体を護るように包み込んでいたのだ。

傀儡は怒りに任せ、その黒い鉤爪で根ごと青冥の袴を切り裂いた。
「ぐっ、ぐううううっ。」

紅主の顔が苦痛に歪む。

「FIRE！」

傀儡は容赦などなく。

残った根にも火を放つ。

青冥の術中。紅主は……動けない。

「ぐあああっ！」

生木を焼く匂いが立ちこめ紅主は叫喚する。

「紅主っ！」

青冥は慌てて術を解く。

紅主はその場に蹲った。

「……この期に及んで他の事を心配してやるとは、余裕だな、陰陽師殿？」

傀儡は青冥の顎を捉え、その憂色の瞳を自分に無理矢理向かせた。
再び、唇が奪われる。

唇から注ぎこまれ続ける陰の気は、激しい頭痛と目眩となって青冥を襲う。

せめて、顔を背けようとした。

だが、傀儡は髪を掴んでそれを許さない。

精一杯の抵抗を楽しみながら、純白の着物の裾に手をかけた。
更に冷たい、未踏の白磁が露になる。

真白を穢す。

禁忌を犯す快樂が。魔の身体を駆け抜けた。

「う……ヤメ……ろ。」

漸く開放された青冥の唇から、未だ拒絶の言霊が吐かれる。

あれだけ陰の気を注ぎ込んでやったのだ。

並の人間なら、淫気に溺れ。

自ら快樂に貪っているだろう。

だが反抗的な青冥の蒼い瞳に陰りは、ない。

この期に及んで、魅了されたのは……自分。

傀儡は格の差を思い知った。

「やかましいっ！」

腹立ち紛れに青冥の頬をはつった。

「ぐっ……」

青冥の形の良い唇の端から。

朱の糸が伝い落ちる。

「まあだ解らねえのか？ お前はもう、俺のモノだ！」

傀儡は滴る血の糸を舌でなぞり、味わった。

血の誓約。

より、大きな赤黒い情念の炎が、青冥を包みこむ。

青冥は、覚悟を、決めた。

闇に飛び出した紅蓮。

青冥の教室、生徒会室、自分の教室、職員室、図書室……。

校舎内の思いつく所は全部探した。

だが、青冥は、居ない。

後は……。

思い当たる場所はただひとつ。

靴を履いて、真っ直ぐに主桜へと向かった。

なぜか。無性にそこが気になった。

半分の月が、寂しく浮かぶ。

皐月の夜風は涼しかった。

だが、焦燥という名の汗が、薄く紅蓮の額に浮いた。

不安が濡れた髪のように頭にへばりつく。

淡い光。

向かう、桜の下には、三つの影。

白い影は見慣れた青冥。

黒い影が、ひとつ、ふたつ。

そのひとつが青冥に歩み寄り、無理矢理、キスを、した。

「セイさんっ！」

隗魔^{かいま}の黒い炎を、深紅の炎が、嘗^なめる。

「なにっ？」

驚く隗魔^{かいま}。

「紅蓮っ！」

炎の色の名を、青冥は言い当てた。

汗で濡れ、より癖の目立つ赤茶の髪。

自分を探して来てくれたのだろう。

「……何なんですか？ コイツら……」

紅蓮はじろり、と隗魔^{かいま}を睨^{にら}んだ。

まずい、見えている。紅蓮には、隗魔^{かいま}と、怪^{あやかし}と化した精霊の姿が。

見えると言う事は、惑わされる、という事。

「来るな、紅蓮っ！」

青冥は慌てて紅蓮を止めた。

だが、紅蓮は構わず歩み寄る。

淡い月光の下^{もと}。

何か……ロープのようなもので縛り上げられ、戒^{いまし}められている青

冥の姿が曝^{さら}される。

白磁の頬には、赤く腫れた殴られた痕^{あと}。

青冥の白衣^{しらぎぬ}を割って、揃いの白磁の内腿^{うちもも}にぴったりとへばりつく、

黒い隗魔^{かいま}の手……。

「……」

紅蓮は目を細めた。

灼熱^{ほとばし}の怒気が、迸^{はな}る。

気が……爆ぜる。

紅蓮は傀儡に殴りかかった。

紅蓮の腕から再び、深紅の炎が生まれる。

「ぐわあっつ」

地面に転がる傀儡。

「畜生っ！ FIRE！ FLAME！ BLAZE！」

連続魔法を唱え、傀儡は保身と攻撃に走る。

紅蓮に黒炎が火山弾の様に飛び火した。

「紅蓮っ！」

手足の自由を奪われ、青冥は術を使えない。

紅蓮はただ……地に転がる傀儡を見下した。

深紅が走り。黒炎を総て呑み込んでいく。

深紅に染まる紅蓮の瞳。

深紅がより、黒炎を屠る。

火剋火。

「ぎいやあ。馬鹿な。俺は炎の眷属だぞ？ それを、それをつ……」

……、ぐあああつ。」

黒い火が、赫い炎に炙られる。

身ごと炙られ、傀儡は悲鳴を上げる。

魔の支配が……薄れていく。

肌で実感し、青冥は桜木に声をかけた。

「紅主、根を解け。」

支配者が焼け焦げるのを、紅主は妄と見守っていた。青冥の声に、

紅主はゆるりと地面に手を翳し、根を地中に納める。

「水神刀！」

召喚に応え、左手の瑠璃の数珠から再び神刀が姿を現す。

青冥は躊躇なく、焼け爛れた顔の傀儡の首筋に刀を振り下ろした。

傀儡が最後に見たものは。

半月と。白磁と。氷の刃。

「……」

傀儡^{かいま}は音も無く消滅した。

「ふう……。」

青冥は深い溜息をつきがくりと膝^{ひざ}を折った。

「セイさんっ！ 大丈夫ですかっ！」

地面に崩れ落ちる前に。

紅蓮がしっかりと抱き止める。

「あ……あ……すま……ない……」

細い肩が喘^{あえ}ぐ。少しでも腕の力を抜くと、細い体がまたすべり落ちてしまいそうだ。

精^{せい}も根^{こん}も使い果たしたのだと紅蓮は気づく。

覗き込んで来る紅蓮の、いつもは優しい茶色の瞳が、今は少し心配そうだ。

青冥は無理に微笑んで見せた。

ヴヴヴヴヴヴ。

紅蓮の制服^{ブレザー}の胸ポケットから、バイブの振動が伝わる。着信は、

佐奈からだった。

「はい。」

「おい、紅蓮。聖^{ひじり}、居たか？」

「はい、佐奈先輩。今、一緒です。ちょっと……イロイロあって……。」

紅蓮自身、今あった事・見た事をどう説明していいか、言葉に迷った。

「紅蓮……貸してくれ。」

青冥は紅蓮の携帯を借りた。

「すまない、佐奈。もう少し……時間が……かかり、そうだ。先に……帰って……くれ。体育館の……鍵を……私の荷物の上に……置いて……いって……くれないか？」

電波の状態が悪いのか？

少し遠い、途切れ途切れの青冥の声。

「解った。……お前……大丈夫なのか？」

「あ……ああ。」

しっかりと青冥を抱え、紅蓮は無理をする青冥から携帯を奪い返した。

「問題ありません。僕が責任を持って、セイさんを送って行きます。体育館も戸締りして帰ります！」

察しの良い佐奈も、それ以上はツツコンで来ない。

「解った。じゃ、紅蓮、夜露^{ヨロシク}死苦。」

そう言って佐奈は携帯を切った。

紅主の姿も、いつの間にか消え失せていた

第二章 はなのいろは（後書き）

次で完結予定です。

一応来週目処。

投稿結果もその時発表します。

第三章 はなよりほかに（前書き）

最終章です。あとがきに、何の雑誌に投稿して、どのくらいの成績だったかを発表します。ご参考いただければ幸いです。

第三章 はなよりほかに

学園を出て直ぐに紅蓮はタクシーを拾った。

最小限の荷物と、青冥を抱えて。

タクシーは真っ直ぐ青冥の家へ。

鍵を開けるのももどかしく、玄関に入るなり、青冥はよろよろと座敷へ向かう。

紅蓮も彼を支えながら同伴した。

座敷の神棚に供えてあるお神酒の瓶を掴み、濡れ縁へと走る。気づいていた。

隣にいる紅蓮の火気に怯え、自分体内で何かがのたうっている事に……。

瓶の封を切り、飲み口に唇を当てるが、重すぎて今の青冥には一升瓶が持ち上がらない。

「これ……飲むんですか？」

青冥はこくこくと首を振って頷く。

紅蓮は男らしくラッパ飲みをすると、青冥の唇にお神酒を流し込んだ。

もう一度、お神酒に手をかける青冥。

「もっと……ですか？」

紅蓮は何度も、隗魔に犯された唇を清めた。

火之御神の火気に炙られた、極上の神酒。

「……ううっ。」

やがて。青冥は体内のモノを吐き出そうとした。

「セイさんっ！」

「ぐっ……くっ、来るなっ！」

青冥の静止も聞かず、紅蓮は青冥を抱き寄せると彼の背を摩ってやる。

「うううっ。」

華奢な背がもう一度波打ち、ついに。

青冥は体内のモノを地面にぶちまける。

青冥の口から、ゼリー状に包まれた無数の卵が……地面に零れ落ちた。

地面に付いた途端に、それは消滅する。

アレが何であつたのか……。

紅蓮は少し、解った気がした。

「セイさん……」

心配そうな瞳で、まだ動けないでいる青冥の口元をティッシュで拭う。

「っ、もういい、穢い、だろう？」

弱弱しく、突き放す腕。

「ダメです。まだふらふらじゃないですか！」

そう言つて、紅蓮は青冥を横抱きに抱え上げ、座敷に戻る。

三連泊した気安さで、手際良く布団を敷き、そこに青冥を横たえた。

「すまない……紅蓮。」

民間人を巻き込むなど、陰陽師として失格だった。青冥は、何とか布団に起き上がると、両の手について謝ろうとする。

「何してるんですか！　まだ、横になってて下さい。……そんな事、しなくていいから。」

そう言つて紅蓮は布団に青冥を押し倒す。

少し怒った様な……だが、優しい、茶目。

「巻き込んでしまって、本当に、すまない、紅蓮……。」

青冥は横になりながらも心から謝罪した。

「いえ。……大丈夫……ですか？」

明るい色の瞳。ぎゅっと握られた手からも、紅蓮の思いやりが伝わってくる。

ただ、少し、ぎこちない態度。

「……驚いただろう。」

「はい、びっくりしました。」

紅蓮は正直に軽く肩を竦めて見せる。

青冥は深い溜息をついた。

これで、紅蓮とも距離が開くだろう。

ほっとした。

だが、何だか……寂しい。

『寂しい？』

自分の感情に青冥は驚いた。

「はあ、でも、お仕事、タイヘンですね。」

「？」

予想外の紅蓮の答え。

「……お前は、恐ろしくはないのか？」

そう言えば、傀儡を捻じ伏せたのは、紅蓮の発した深紅の炎。

西洋の……白魔法とも違う。あれは……。

「悪魔払い……なのか？」

真実を見抜こうと。

青冥は、澄んだ瞳を紅蓮に向ける。

紅蓮は困ったように首を横に振った。

「では、なぜ、術が使える？」

「解りません……。あれは、セイさんの、あんな姿を見て、カッと
なって……」

澄んだ茶目に嘘の影はない。

やはり、無意識なのか……。

「こんな事は度々あるのか？」

「いえ。ものすごく、怒ったりすると、体中がカッとなって、燃えて
いるような気分になる事がありました……。」

「そうか。」

青冥はじつと紅蓮を見つめ続けた。

紅蓮の瞳が迷いで揺れ……。

そして、言葉が続ける。

「……僕、今の保護者……。育ての親と産みの親が違うんです。産みの母さんは、巫女^{Miko}だったって聞きます。僕を産んですぐ亡くなってしまったけど。それと何か関係があるのかもしれませんが。」

「そうか。……ならば、余程高位の巫女だったのだろう。」

青冥にとって、一番納得のいく答えだった。唇からもう一度、深い溜息が零れ落ちる。

白磁に浮く疲労は濃い。

「セイさん……。お仕事はいつもこんな？」

白絹は泥で汚れ、最早原型を留めていない。

頬には、魔の爪痕……。

端正な唇の端の殴られた痕^{あと}は、もう、赤黒く変色しかかっている。紅蓮はそつと頬の爪痕付近に触れた。

その、大きな手で、冷たい青冥の指を握る。

彼の気は、ひなたのようで。

やさしい。あたたかい……。

「いや、油断した私が悪い。」

青冥は決して驕^{おご}る事はない。

「……だが、今回は、お前が居てくれて助かった。ありがとう。」

微かに微笑み、心から礼を言う。

そつと握り返された手。

^{はかな}儚い、微笑み。

「セイさん……」

手がぎゅっと。きつく握り返された。

「もし……もし、今日、僕が居なかったら？」

恐らく、あのまま、魔物に犯され、自分も魔物と化していた……だろう。

「……」

青冥は答えられない。

「僕は……僕はイヤだっ！　僕の居ない所で、あんな……あんなっ

！
」

「紅蓮？」

手がきつくきつく、痛いほどに握られる。
再び、迸る。^{ほとば}熱い、火の気。

「ぐっ、紅蓮っ！」

青冥は思わず手を引いた。

紅蓮ははっと我に返る。

手を離して、泣きそうな顔。

茶目がじっと見つめる。

「……あなたが、好きです……」

紅蓮は布団ごと、青冥を抱き締めた。
解っていた。

演技から伝わる、本気の言霊^{こしだま}。

わかっていた。

抱く腕から溢れる、愛おしい気。

わからないふりを、していた。

「紅蓮……。」

「セイさん……。」

重なる。視線。くちびる……。

「……いいんですか？ 演技の為じゃ……ないんですよ？」

「……。」

ハグもキスも。

もはや、違和感は感じなくなってしまっていた。

「！
」

紅蓮はそれに気づいた。

「セイさんっ！」

紅蓮は布団を押しつけた。

紅蓮の体が、自分の体に重なる。

指と指とが絡み。もう一度、唇が重なる。

「う……ん。」

傀儡かいまが犯すより。強く、激しく。

なだれ込む、極上の火気。

熱い、想い。

「……ふっ……んんんんっ。」

傀儡かいまが犯すより、深く、濃く。

絡みあう、熱い舌。

切ない程の、想い。

熱く、熱い。

水気とは真逆の火気に、青冥の瞳は潤うるんだ。

熱い唇。ようやく、開放される。

「うむ……はっ、……」

青冥の唇から、吐息が漏れる。

「セイさんっ！」

紅蓮は堪らず、帯を解き、青冥の胸元をはだけさせる。

灯りの下、透ける白磁。

所々に刻まれた、魔の刻印……。

「紅蓮……。」

青冥は成すがままになりながらも、蒼あおいほどに澄んだ瞳で紅蓮を見つめる。

「……何故……抵抗しないんですか？」

紅蓮の口元に、ふと自嘲が刻まれる。

「僕が、あなたに何をしようとしているか、解っているんですか？」

意地悪いじわるな唇。想いとは裏腹の言葉ことば。

組み敷かれたまま、青冥は考える。

口づけと同じく、このまま彼の想いを受け入れればもう二度と魔に支配される事はない。

例え、今回の様に魔に犯されたとしても。

「……」

黙考の青冥。紅蓮は続けた。

「……本当にいいんですか？ セイさん。僕はあなたに……。」

そう言つて。細い首筋。冷たい白磁。

魔がつけた刻印と同じ位置に熱い唇を押し当てる。

火気が爆ぜ。刻印がまたひとつ浄化される。

「っ！」

キスをするたび、擦つたそうにして。

「紅蓮……」

青冥は困つたように紅蓮を見つめる。

紅蓮はきつくきつく、青冥を抱き締めた。

辛うじて、理性で自分を押し留める。

これじゃ、アレと……おんなじだ。

「僕は……あなたに、あの魔物と同じ事をあなたに『したい』と思つているんですよ？」

「違うっ！」

青冥は断言した。伝わる、熱く、篤い。

切なく、苦しい程の深い、想い。

「お前は、違う。紅蓮。」

叩きつけるだけの欲望。

あの魔物と同じはずは、ない。

「！　そう思つて……くれるんですか！」

紅蓮はぎゅっと首にしがみついてくる。

「大好きです、セイさんっ！」

まるで、大きな子供みたいだ。

青冥はくすりと笑うと、紅蓮の赤茶の癖毛をそつと撫でてやった。

「……紅蓮、聞いてくれ。」

軽い溜息。青冥は真剣な蒼い瞳で続ける。

「今回、私が魔に染まらなかったのは、初めにお前とくちづけていた所為だ。助けて貰った事もあるが……本当に感謝しているのは、むしろ、その事の方が大きい。」

「セイさん……僕は……実は、演技の為だけじゃなくて……」

紅蓮は照れくさそうに本音を告げる。

「ああ。解っている。いや、解っていた。」

青冥は更にじっと見つめ、言葉が続けた。

「紅蓮、知っているか？ 魔物は無垢^{むく}ほど穢^{けが}し易^{やす}い。お前とのくちづけがあったからこそ、私は魔に染まらずに済んだ。もし、お前とここで交^{まじ}われれば……私は、術者として、不可侵の身体を手に入れる事ができる。」

無口な青冥が珍しく仕事の事を自ら語る。

紅蓮は黙って耳を傾^{かたむ}けた。

「くちづけも、性交も。いずれは、陰陽師^{おんみょうじ}の儀式の一環として受けていた行為だ。……お前であれば、私は穢^{けが}れる事はない。」

青冥の言葉に。紅蓮は敏感に反応した。

「儀式って……。相手は誰ですか？」

「……解らない。兄弟子^{あにでし}か長老^{ちやうろう}か……。何れにしても、上司^{うえ}の決める事だ。」

ちりり。肌が真夏の太陽にじりじりと炙^{あぶ}られるような感覚。そして、手がぎゅっと握り返され、茶目が覗き込む。

「そんなの……。セイさんはイヤじゃないんですか？」

「嫌も何も……。私に取っては、儀式でしかない。だが、お前^{まえ}ならば……嫌では、ない。」

「……僕は……。イイですよ。……セイさんにとって、儀式^{ぎし}でしかない行為でも。」

紅蓮の辛そうな瞳。青冥は初めて気づいた。

彼の嫉妬に。彼を、深く傷つけていた事に。

「……すまない、紅蓮。私の言い方が悪かった。……お前^{まえ}が、いい。」

「セイさんっ！」

抱き締められたと思ったら、キスの嵐。

もう、止めようがなかった。

夢中で青冥の唇^{くちば}を貪^{むさぼ}る。

「ん……。ふっ……。ぐっ、紅蓮……。」

くちびる。ゆび。くびすじ。

紅蓮の触れた場所に火花の散るような感覚。
やがて……。

ゆらり、その場所に炎が立ち登る。

肩。鎖骨。そして、胸の蕾……。

炎は燃え上がり、熱い深紅の花が咲く。

深紅の花は次々に花開き……。

白磁を蕩かしていく。

「……っ、はっ……はっ……。」

花開く度、青冥の吐息は甘く甘く。

闇に、響く。

「セイさん……。」

強い薄茶の瞳が絡んでくる。視線に、火花。

交わす唇。極上の火気。

もう一度、胸の蕾で遊んでから、紅蓮の熱い手がゆるゆると。細い腰を伝い、降りる。

「感じてくれているんですね。良かった。」

そう言って、青冥の核心にそっと触れる。

「うっ……。」

他人の与える感覚。身体がびくりと撓った。
やわやわと。紅蓮は正に核心を弄ぶ。

「ふふっ。もう、とろとろ。」

くすりと笑い、現状報告。

「紅蓮……。」

羞恥と。泣く寸前のような。

そんな感覚が込み上げてくる。

紅蓮の指はきつく、ゆるく。

青冥自身を捕らえて、決して離しはしない。
やがて。

「ぐっ、紅蓮っ、はっ、もっ、もうっ！」

「イイですよ。僕の手で一回イって？」

熱い指と、紅蓮の火気が。

青冥を高みへと追い上げる。

「っは、ああっ！」

ついに。闇に、白い花が、咲いた。

紅蓮の手にも咲いた花を、紅蓮はぺろりと嘗^なめる。

「なっ！ 汚い、だろう！」

驚く青冥に、悪戯^{いたずら}な笑み。

「きたなくなんかナイですよ？ ほら。」

紅蓮は白い花卉の零れ落^{こぼ}ちている茎^{くき}へも、直接キスをする。

「やめっ、紅蓮、きたなっ……っは、ぐっ、紅蓮っ。」

自分の核心を包む熱い唇。初めての、感覚。

熱く。熱く。灼熱の炎はもう一度。

達したばかりの高みへと青冥を押し上げる。

「ああっ。ダメだっ、紅蓮！」

必死で逃れる身体。

だが、紅蓮は細い腰を抱いた腕を緩^{ゆる}めない。

逃さない。

「ダメだっ、紅蓮……。っは、そんなに、したら、ふっ、お前の口
にっ……。」

ふと。紅蓮の唇が離れた。

「……イイですよ？ 僕の口でイって。」

再び、熱い唇があてがわれる。

一度は治まりかかった波。より大波となる。

「はっ、紅蓮っ、やめっ、やめろっ、紅蓮！」

必死の抵抗。

だが、紅蓮は逃れる事を許さない。

「ああっ！」

とうとう。

白い花はもう一度、紅蓮の唇に咲いた。

「……すっ、済まない、紅蓮……。」

青冥の切れ長の瞳には、うっすらと羞恥と。 快樂の涙が浮かぶ。

「……美味しい。」

紅蓮は悪戯いたずらっ子の顔で、口の周りの花卉はなびらも嘗め取った。

「紅蓮……。」

達した後の風なぎ。泣いた後のような感覚。

それも束の間つか、再びくちづけを開始した。

今度は、膝ひざ……太腿ふともも……内股うちまた。

花芯により近く。火花が散り、再燃する。

紅蓮はもうひとつ。

奥に潜む菊花を探り出す。

「……！ 紅蓮っ……！」

思わず。身体あらがが抗う。

「……知らないんですか？ 今から僕がここに……。」

知っている。知識は、ある。

だが、経験は……。

戸惑う間もなく、紅蓮の指が菊花の中心に滑り込む。

正に。違和感。

あまつさえ、自分の意思に反して中で蠢蠢く。

「ううっ……うううっ……。」

「セイさん……痛い？」

痛くは、ない。

だが、『不快』と言った方が正しい。

「……。」

青冥はただ、首を横に振った。

「痛かったら言って下さい。」

紅蓮はゆつくりと。

初咲きの菊花の蕾指つぼみで綻ほころばせていく。

「ううっ……ふっ、はっ……。」

いつ頃からか。紅蓮の指が起こす波に。

不思議な感覚が宿る。

「はっ……はっ……ぐ、紅蓮……。」

「何？ セイさん。」

身体の反応。吐息の甘い変化を。

紅蓮は見逃さなかった。

「そろそろ……かな？」

紅蓮はそっと、指を引き抜いた。

そして、青冥の菊花の中央に、自分の核心を押し当てる。

「いくよ、セイさん……」

灼熱が自分に宛^{あて}がわれ。ゆるゆると。

体内^{なか}に押し入ろうとする。

「う……」

余りの質量。青冥は戸惑った。

「セイさん。力……抜いて。入れない……」

紅蓮は緊張を解^{ほぐ}す様に、優しく。

優しく額^{ひたい}にキスをする。

「あ……あ。す、すまない……」

青冥は素直に従った。

熱い塊^{かたまり}が。ゆっくりと。押入って。

青冥の体内で絶対的存在感を主張する。

「ううっ。」

思わず漏れる声。白磁には苦痛の影が浮く。

「……痛い……ですよね？」

紅蓮は、自分が痛いような顔。

熱い手で、そっと冷たい青冥の頬に触れる。

「ごめんなさい、でも、僕。もう、欲しい。」

ぐい、と両足が大きく開かれ、紅蓮の灼熱はより深みへ侵入してくる。

「ああああっ！」

痛みは、一瞬。

そして、より内奥で存在を誇示し続ける、熱い熱い、塊かたまり
自分の中に、紅蓮が、居る。

「紅蓮……。」

「セイさん……。辛く、ない？」

覚悟したほどの激痛は、不思議と無い。

青冥は首を横に振った。

ただ、どうしていいか、解らない！

「セイさん……。」

紅蓮はゆつくりと慎重に動きはじめる。

鈍い痛み。それと、熱い、絶対的異物感。

紅蓮が動くたび、不思議な波が生まれる。

熱い、熱い。

鈍痛と違和感は、徐徐に。

別の感覚に摩すり替わっていく。

「……っは、はっ。ぐっ、紅蓮……。」

どうしようもなく。

切れ長の蒼い瞳の端に滲にじむ涙。

乱れる、吐息。

紅蓮はそっと。青冥の涙を唇で掬すくう。

それは、より内奥へ紅蓮を誘う事になる。

「っああっ！ 紅蓮っ！」

青冥の菊花にきつく抱き締められた。

「セイさんっ！」

紅蓮は堪らず、青冥の手に指を絡める。

ハジケル。

熱い、あつい、アツイ、火気。

「ぐっ、ぐれっ……。」

青冥に更にキツく、抱きしめられる。

「セイ、そんな、されたら、僕、もうっ！」

「ああああっ！」

一際、熱く。ひとときわ

紅蓮の想いは、青冥の中で弾け飛んだ。
紅蓮の腕の中。心地よい人肌の温かさ。
経験した事のない、優しい、甘い時間。

「僕……夢中で……。ごめんね、痛く……。なかった？」

茶色い瞳が心配気に覗き込む。

「……大丈夫だ。」

青冥は、はんなりと笑顔を咲かせた。

傀儡かいまの穢けがれは……。消え失せていた。

満みちる、極上の火之御神の火気。ほのみかみ

沸わいたような感覚。

契ちぎりの、証。あかし

「……。」

紅蓮はじっと、青冥を見つめる。

「……愛して、います。」

演技ではなく、真実の。紅蓮自身の言霊。ことだま

「あなたを護まもりたい。」

誓いのくちづけ。

「……もうこれで、儀式は受けなくてもいいんですよ？」

「ああ、紅蓮……」

絡む、視線、指。再び交わされる、唇。

青冥はそっと。紅蓮の手を握り返す。

「お前で、良かった……。」

きれいなほえみ。

紅蓮は堪らず、青冥を抱き締める。

「セイ、知らないよ？ そんなかわいい事を言って。」

「可愛い？」

それは女性に対して使う形容詞ではないだろうか……？

「うん、かわいいっ。あなたはもう、僕のものだ。もう、誰にも渡さない！」

痛い程に、強く強く、抱きすくめられる。
熱烈な、言霊^{ことだま}。脳が沸き^わそうな火気。

この強さは、最早、呪^{じゆ}に近い。

重い重い言葉の鎖。きついきつい肉の枷^{かせ}。
だが、強い言霊^{ことだま}も、強い腕も。

今の自分は嬉しいと感じてしまう。

静かに更^ふける夜。

初めての二人だけの、共有時間。

吹く風は優しく、初咲きの花を散らした。

怒濤の週末は再び開けた。

劇は……大成功だった。

押し寄せる賞賛。

一人になりたくて、青冥は劇の衣装を身に着けたまま、主桜へと
逃げる。

遠くには後夜祭^{プロム}の音楽。

日の落ちた、少し冷たい風が心地よい。

「……セイっ!」

後ろから、元気な声が呼び止める。

「紅蓮……」

青冥はゆっくり振り向いた。

「もしかして、お邪魔、だった?」

紅蓮も衣装を着たまま。

自分を追ってきたらしい。

首を傾^{かし}げる紅蓮。青冥はくすりと笑う。

「いや。……だが、驚いた。」

「何が?」

「劇の最後にあんな……。」

青冥の言葉に紅蓮の口元が悪戯^{いたずら}っぽく綻^{ほころ}ぶ。

「あんな?」

そう言って、つい、と自分の袂たもとで青冥の貌かおを隠す。

その影で、舞台の時と同じく、青冥のくちびるを……。

「……主さま……これでしょうか……。」

自然と。青冥の口から劇終盤の、華那ヒロインの台詞セリフが流れ落ちる。

「？」

紅蓮は不思議そうに今度は反対向きに首を傾かしげた。が、青冥に付き合う。

「ああ、華那かな。もう……離さない！　そなたは我のもの。我は……そなたのもの。」

「……」

一番驚いたのは、実は、青冥自身だった。

思わず口走ってしまった唇を押さえ、何かを考え込んでしまう。
やがて……。

「そうか！　この唐衣からころもかつ！」

思い当たったのか、自分の着ている桜色の着物の袖そでを握り締める。
そして、紅蓮をじっとみつめた。

「紅蓮……私が信じられるか？」

真剣な蒼い瞳あお。紅蓮はこくりと頷うなずく。

青冥は紅蓮の額ひたいに冷たい指を押し当てた。
もう一方の指は、主桜の幹へ……。

「来たれ、紅主。お前の望み、叶えよう！」

青冥の声が遠のき……夢を見ている感覚。

「……主さま、お会いしようございました。」

青冥がそう言ってしなやかにしがみつく。

「ああっ、華那かなっ！　私も、私もだっ！」

自分の声で伝わる、劇中の台詞。

だが、紅蓮の意思で発した言葉ではない。

「永かった……。ほんに、永かった……。久遠くおんに思える程に……。」「
青冥も華那の台詞を続け、紅蓮の腕の中にすっぽりと抱すくめられる。」

「ああ。永い……。永すぎる時空は私を歪め、浅ましくもこの身を、崇り木へと自ら堕としてしまった……」

「ああ、主さま……。」

ここまででは劇中通り。だが……。

「私も、あなた様にお会いしたい一心でこのような姿に……。」

青冥は、いや、華那の魂は、そう言っ、桜色の唐衣を恥じる。

「桜木は自ら動けぬのが性。ならば、と想い、私は、このみで反物を染め上げ、九十九神にこの身を襲しました。いつか、あなたさまに巡り会える事を固く信じて！ 浅ましいのは私の方です！」

「華那……華那……。」

自分ではない、だが、自分と同じ……いや、それ以上の、狂おしい程の愛情が押し寄せる。

紅蓮は青冥の……いや、紅主は華那の身体をきつくきつく抱き締めた。

「いや、そなたは美しい。」

「あ……主様……。このような私を『美しい』と仰って下さるのですか？」

恋い続けた、華那の黒曜石の瞳から、美しい涙が零れ落ちる。

「ああ。お前ほどに美しい者など、この世にはおらぬ。愛している、華那……」

紅主は、優しく涙を拭ってやった。

「……主さま……。」

華那は満ち足りて。そっと腕に寄り添った。

「名を呼んでくれぬのか？ 私の名を……」

「紅雨。」

ぴいん。弦を弾くような音がして。

紅主の体内の穢れが徐々に消えていく。

夢の中で、春雨に包まれているような感覚。

紅蓮は青冥が浄化をしたのだと気づいた。

二人の影が一つに重なる。

悲願の達成。

二つの魂は浄化され、昇華していく……。永い永いくちづけの後。

紅蓮の夢は、覚めた。

「紅蓮……大丈夫か？」

青冥の声に紅蓮は完全に現^{うつ}戻る。

「セイ……今の……。」

「お前に、よろしくと言っていた。」

穏やかな微笑が青冥の口元に浮かぶ。

「お前が、私を信じてくれたから出来た。ありがとう……。」

「僕は何も……。」

そう言う紅蓮の瞳に、二つの光の御魂^{みたま}。

ふたつは寄り添い、じゃれるように絡み合いながら天に昇っていく。

紅蓮と青冥はそれを空へと見送った。

その軌跡^{みおつくし}を。

ひさかたの　ひかりのとけき　はるのひに

しつこころなく　はなそちるらむ

後日。

『主桜の下で真実の愛を誓った者は、必ず結ばれる』

新しい櫻華^{おうかだい}台学園伝説がひとつ、生まれた

第三章 はなよりほかに（後書き）

最後までお目通し頂き、ありがとうございました。

こちらは、D E A R + 第3次通過……あと、4時があつて、入賞、という所でした。

力及びませんでした。が、元々随分昔に書いた150Pくらいの同人誌の手直しでした。

なので、100Pにするために場面を削る削るW

次回は200Pにこの話を膨らませて投稿してみたいと思っています。

ご感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6285x/>

みをつくし ～春恋桜～

2011年10月22日08時09分発行